平成27年　野球殿堂入り記者発表

館長　廣瀬　信一

１月23日㈮午後２時より当館の殿堂ホールにおいて、「平成27年 野球殿堂入り記者発表」が行われました。競技者表彰・プレーヤー表彰は、頭脳派捕手として活躍、ヤクルトの黄金時代を築いた古田 敦也さんが選出されました。古田さんは大学・社会人を経てプロ入りした選手として初めて通算2000本安打を達成し、チームのリーグ優勝５回、日本一４回に貢献されました。エキスパート表彰では残念ながら、選出されませんでした。特別表彰からは、日本リトルリーグ設立に尽力された故・林 和男さんと、今年で節目の100年目を迎える全国中等学校優勝野球大会（現・全国高等学校野球選手権大会）を創設した、朝日新聞社創業者で元社長の故・村山 龍平（りょうへい）さんが選出されました。

熊崎 勝彦理事長からの本年野球殿堂入りの発表、挨拶に続き、永瀬 郷太郎代表幹事より競技者表彰委員会の、また池田 哲雄特別表彰委員会議長より特別表彰委員会の選考過程について各々報告がありました。熊崎 理事長から殿堂入り通知書がそれぞれに授与されました。顕彰者の挨拶では、プレーヤー表彰の古田さんが「まさか、このようなところ（野球殿堂）に入れるとは思ってなかった。両親に感謝したい。そして、野村 克也監督と若松 勉監督…いろんな方に感謝したい。」とここまで支えてくださった方々に笑顔で感謝の言葉を述べられました。特別表彰では、林さんのご長男・清一さんから、「リトルリーグは野球を通じて世界各国の子供たちと交流を持てる。一人でも多くの子供たちにこの経験をさせたい。その思いで父は普及に努めました。球界最高の栄誉を頂いたことを墓前に報告したい」としみじみ話されました。また、村山家の代理として通知書を受けられた飯田 真也・朝日新聞社会長は、「高校野球を愛する全ての人の代表としていただいたと思う」と喜びを語りました。また、村山さんのお孫さんで朝日新聞社社主の村山 美知子さん、そして日本高等学校野球連盟の奥島 孝康会長からも喜びのコメントがよせられました。

ゲストスピーチでは、古田さんとは同じ90年にプロとなり、昨年殿堂入りした野茂 英雄さんから、88年ソウル五輪で銀メダルを獲得した代表合宿での出会い、また現在のプロ野球では球の速い投手に捕手が追いついていないので、古田さんの技術を後進に伝えてほしいなど、ユーモアを交えての祝福の挨拶がありました。林さんのゲストスピーチでは、全日本野球協会副会長、日本オリンピック委員会理事の鈴木 義信さんが「林さんの少年野球にかける思いは満票で当選されるに値する功労者。私たちは林さんの教えをベースに野球の普及に頑張っていきたい」と語られました。村山さんのゲストスピーチでは全日本野球協会専務理事の内藤 雅之さんから、「村山さんは高校野球の隆盛の基礎をつくった。この先、50年、100年、野球が日本の最高のスポーツであることを願いたい」と、その偉業に対し感謝の言葉を述べられました。

最後に、殿堂入りされた方々とゲストスピーカーなどを交えた記念撮影を行いました。

今回の記者発表は、安全面に配慮し博物館を臨時休館として、維持会員様とマスコミの皆様に限定して行いました。今後もこのような形で野球殿堂入りの発表を行いたいと思います。

後列左から　野茂 英雄氏、鈴木 義信氏、内藤 雅之氏
前列左から　古田 敦也氏、熊崎 理事長、林 清一氏、飯田 真也氏

懇親会

昨年に続き、東京ドームホテルで記者発表後の懇親会を行いました。野球殿堂入りをされた古田さんをはじめ、熊崎 理事長など関係者約30名の方々にご出席をいただきました。１時間半ほどの小宴でしたが、皆さんリラックスした雰囲気の中で和気藹々と楽しんでいらっしゃいました。これからも野球殿堂入りされた方々と親睦を深める場を持ちたいと思います。

競技者表彰委員会

第55回競技者表彰委員会はプレーヤー表彰で眼鏡をかけた捕手、頭脳的なリードと勝負強い打撃でヤクルトを5度のリーグ優勝、4度の日本一に導いた古田　敦也氏を野球殿堂入りに選出した。

現役を引退して5年を経過し、かつ引退から21年未満の有資格者の中から幹事会が23人の候補者を選び、野球報道に関して15年以上の経験を持つ348人の委員のうち334人から最大7人連記の投票（有効投票数332）があった。殿堂入りに必要な得票率75％を超えたのは76.8％にあたる255票を獲得した古田氏一人だった。

古田 敦也氏　写真提供：ベースボール・マガジン社

古田氏は立命館大時代から強肩捕手として注目されながら1987年ドラフトでは眼鏡をかけているのが敬遠されて指名がなく、社会人のトヨタ自動車に入社。88年のソウル五輪では昨年殿堂入りした野茂 英雄氏とバッテリーを組み、銀メダル獲得に貢献した。

89年ドラフトでヤクルトから2位指名されて入団。就任したばかりの野村 克也監督と巡り会った。1年目の90年から106試合に出場。新人捕手では初のゴールデングラブ賞に輝いた。2年目の91年には打撃も開眼し、打率3割4分でセ・リーグの捕手では初の首位打者を獲得。97年は正力松太郎賞に選出された。ベストナイン9度、ゴールデングラブ賞10度。2005年には捕手としては野村氏に次いで二人目、大学・社会人を経てプロ入りした選手としては初の通算2000本安打を達成した。

近鉄とオリックスの合併に端を発した04年の球界再編問題では、労働組合日本プロ野球選手会の会長として12球団、2リーグ制維持に尽力。06年から2年間は選手兼任監督を務めた。18年間で2008試合に出場し、2097安打、217本塁打、1009打点。終身打率は2割9分4厘だった。

1月23日に野球殿堂博物館殿堂ホールで行われた発表の席。古田氏は「まさかこのような所に入れるとは夢にも思っていませんでした。いろんな人に感謝しなければいけないと思っております。この場をお借りして…」と両親に始まり、アマチュア時代の恩師への謝意を口にした。眼鏡をかけた捕手はプロで活躍できないと言われていた時代。特別表彰で殿堂入りした林　和男氏のゲストスピーチで来場していたソウル五輪の日本代表監督、鈴木 義信氏（現全日本野球協会副会長）に当時、相談したところ「眼鏡は関係ない。おまえの力だったらいける。プロで暴れてこい」と背中を押されたという。

続いて野村監督には「プロ野球の最高のキャッチャーだった方が監督でいてくれて、厳しい指導をしていただきました。それがなければ殿堂入りなんか絶対にできなかったと思います」。その指導に耐えられたのは「恥ずかしかったし、悔しかった」と振り返る苦い体験があったからこそ。記者会見場を用意しながら指名されなかった大学4年時のドラフトで「絶対に見返してやる」という反骨心が芽生えたのである。

ゲストスピーチに駆けつけた野茂氏は日本代表で出会った当時のエピソードを披露。「なんでこの人がプロに行かれへんのかなというぐらい守備力が高かったのに驚きました」と持ち上げておいて「次に驚いたのはプロに入って首位打者を獲ったときです。アマチュア時代セーフティーバントしか見てなかったんで」。爆笑スピーチで僚友を祝った。

プレーヤー表彰で惜しかったのは246票で当選必要数に3票及ばなかった斎藤 雅樹氏と243票で6票足りなかった原 辰徳氏。斎藤氏は資格期間がまだ残っているが、原氏は今年が資格最終年で今後はエキスパート表彰の対象に回る。

エキスパート表彰は残念ながら2年連続で当選者が出なかった。殿堂入りしている皆さんと表彰委員会幹事、野球報道30年以上の合計119人の委員のうち109人から最大5人連記の投票（有効投票数108）があったが、最多得票は榎本 喜八氏の66票で、有効投票数の75％にあたる当選必要数81票に届かなかった。

候補者はいずれも選手、指導者として実績を残した功労者。だからこそ票が割れるのかもしれないが、来年に向けて候補者の絞り込み等を幹事会で検討していきたい。

（競技者表彰委員会代表幹事　永瀬 郷太郎）

特別表彰委員会

ホール・オブ・フェイマーも、時代の要請によって誕生する。そんな意思が色濃く反映された、2015年の表彰者を選出する結果となった。

一昨年、特別表彰委員会の規程を一部変更するための委員会が、行われた。昨年から適用される規程が、新時代に相応しい指針として改正されたのだ。

①現役を引退したアマチュア野球の競技者（選手、コーチ、監督）の中で、選手は引退から５年、コーチ、監督は引退から６カ月が経過している者。

②プロ及びアマチュア野球の審判員の中で、引退から６カ月以上経過している者。

③プロ及びアマチュア野球の組織の運営と管理に関して、野球の発展に顕著な貢献を示した者、またはしつつある者。

④日本の野球の普及と発展に著しく貢献した者、さらにしつつある者。

選出方法に関しては、プロ野球の役員及び元役員、アマチュア野球の役員、野球に関係する学識経験者（計14名）が、表彰者選考委員会を開催する。その中で、各委員の投票により、75%の得票を得た者が、野球殿堂入りを確定する（14名の投票者なら獲得11票）。

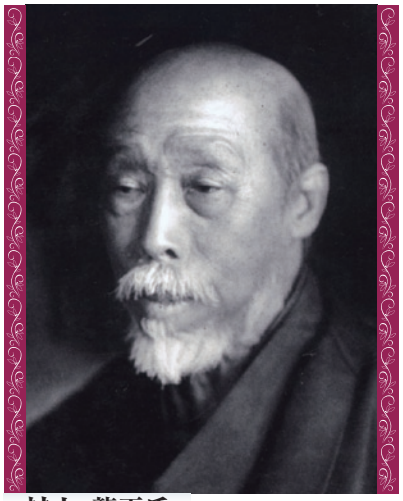
本年度は１月20日の午後２時から、東京ドームホテルで、特別表彰委員会が開催され（正式発表は同23日）、候補者として俎上に挙げられた10名の中から、75%の得票を得た者は２名だった。投票13名（当日は欠席者１、委任状１、75%を上回る得票は10票）の中から、林 和男氏（1923年～2009年）が、満票となる13票を獲得。さらに獲得票12の村山 龍平氏（1850年～1933年）が、晴れて野球殿堂入りの栄誉を獲得した。

林　和男氏

林氏は、林建設を経営する傍ら、64年、小学生が硬式野球を行う調布リトルリーグを創設。67年には西東京リーグから選抜された選手を率いて、第１回全日本選手権大会で優勝。この年、米国ペンシルベニア州ウイリアムスポートで行われた、世界選手権大会に監督として駒を進め、チームを世界一に導いた。

76年には、同リーグの会長として、荒木 大輔投手（早実－ヤクルト）を擁し、世界選手権大会を制覇。一躍リトルリーグの名を日本国内に轟かせた。野球の底辺拡大と普及に努め、技能向上に貢献したことが、認められての受賞だった。

さらにリトルを卒業した、球児たちに高校までの空白期間となる、中学時代にも硬式野球を行う組織として、調布シニアを創設。2000年には、日本リトル野球協会と日本リトルシニア野球協会を統合させ、全日本リトル野球協会を創設している。小学校から高校までの一貫した、硬式野球を継続するための組織と体制を作り上げたのだ。



村山 龍平氏　写真提供：朝日新聞社

村山氏は、朝日新聞社の創業者である。朝日新聞の社長在任中の1915年、現在の夏の甲子園「全国高等学校野球選手権大会」の前身となる「全国中等学校優勝野球大会」を創設。当時は大阪豊中市の豊中グラウンドで、わずか10校の参加校からスタートした同大会を現在の国民的イベントへと発展させた功労者だ。この大会の創設により、全国に中等学校野球の人気が高まり、その後、「全国選抜中等学校野球大会」（現在の選抜高等学校野球大会）が開催されるなど、中等学校野球が、国民的行事として定着する礎となった。現在でも、高校野球が日本の野球の裾野を広げ、技術の向上に貢献していることは、言うまでもない。

奇しくも今年は、同大会が創設されてから100年目（大会の回数は戦火のため、中断を余儀なくされて、97回目）という節目の年を迎えた。熟成した、日本の野球も、世界のリーダーとして、より一層の飛躍が求められる時代がやって来たという証左でもある。

（特別表彰委員会議長　池田 哲雄）

プロ野球新人選手108名来館！

１月13日㈫、「2015年NPB新人選手研修会」の前に、新人選手と審判員計108名が来館されました。当日の午前中は休館し、セ・リーグの選手と審判員、パ・リーグの選手の２回に分けて見学が行われました。選手たちは、戦没プロ野球人の名前が刻まれた「鎮魂の碑」、プロ野球の歴史に関する展示、野球殿堂ホール、それぞれの球団ゆかりの資料などを、50分ほどかけて見学されました。

「鎮魂の碑」を訪れるセ・リーグの選手たち
（ベースボール・マガジン社　提供）

プロ野球Todayコーナーを見学するセ・リーグの選手たち

王選手の刀を見学するパ・リーグの選手たち
（ベースボール・マガジン社　提供）

野球の歴史コーナーを見学するパ・リーグの選手たち
（ベースボール・マガジン社　提供）

日米野球コーナーを見学するパ・リーグの選手たち
（ベースボール・マガジン社　提供）

アマチュア野球コーナーを見学するセ・リーグの選手たち

野球殿堂レリーフを見学するパ・リーグの選手たち
（ベースボール・マガジン社　提供）

野球殿堂ホールを見学するセ・リーグの選手たち
（ベースボール・マガジン社　提供）

殿堂入りの人々を語る(46)

2010年　野球殿堂入り
江藤 慎一氏レリーフ

兄・江藤 慎一の想い出

江藤　省三（2010年野球殿堂入り　江藤 慎一氏弟）

野球人としての江藤 慎一は豪快、闘将、火の男などと戦国時代の武将のようなイメージを持たれていましたが、私たち家族には優しい気配りの長兄でした。父が出征していた戦時中、兄は母とともに私を背中におんぶし、賢二（次男）の手を引き疎開先を転々としたと聞きました。1946年、父の復員後は母の故郷熊本県山鹿市で家族６人が過ごしました。戦前、父が社会人野球八幡製鉄の選手だったこともあり、その影響で野球をはじめた兄は中学時代には地元でも有名になり、県大会で更に山鹿中学に江藤 慎一ありと言われるまでになりました。中学３年の夏、父親の転勤で西部中（現松橋中）に転校、二学期から編入する予定でしたが、８月初め野球部を訪ねて入部しました。優勝とは縁のなかった西部中学が８月中に行われた２つの大会で優勝したとあって、小さな町中の評判になり、松橋小学校に転校した私も初日から江藤 慎一の弟として鼻高々だった記憶が鮮明に残っています。熊本商業―日鉄二瀬から中日ドラゴンズに入団した兄は一年目から主砲として活躍しました。1964、65年には王 貞治選手（巨人）と首位打者争いのデッドヒートを繰り返し、全国の野球ファンを熱狂させました。そして２年連続で首位打者を獲得。当時のマスコミは兄が毎晩飲み歩いてもヒットを打つ豪快なイメージで報道していましたが、神経質な兄は飲みに出かけないと寝付けない人でした。当時、大学生の私は東京遠征の度にホテルを訪ねて行き、参考書を買うからとよく小使いをせびっていました。兄が大学はそんなに参考書代がいるのかと担当記者に尋ねたことからバレて叱られたことも今は懐かしい想い出です。1965年、私は第一回ドラフトで巨人に３位指名で入団。翌年の５月３日、後楽園球場での巨人―中日４回戦で私は初めてスタメンで出場しました。兄・慎一はもちろん中日の４番ファースト。私が１打席目に小川 健太郎投手から中前打を打ったときの、一塁手の兄とのツーショット写真は今でも毎日ながめていますが最高の思い出の一枚です。1969年、私が中日に移籍したときは、兄弟で初めて同一チームでプレーすることができると、兄も大喜びしてくれました。しかし、まさか１年限りで再び別々のチームになるとは思ってもみませんでした。私が大学の先輩水原 茂監督に声をかけてもらい中日入りしたため、兄もそれなりに水原監督には尊敬の念を抱いていましたが、どこでどうボタンの掛け違いが生じたのか、オールスター過ぎから水原、江藤 慎一の確執が始まりました。この時期、私たち兄弟はもちろん両親も一番つらい時期を過ごしたと思います。その後、兄はロッテに移り、1971年に史上初の両リーグ首位打者となりました。これは2011年、内川 聖一選手（ソフトバンク）が２人目となるまで40年間唯一の記録でした。2003年夏、脳梗塞で入院、５年間の闘病生活の末2008年２月28日死亡、享年70歳。そして2010年、野球人として最高の栄誉である野球殿堂入りを果たしました。生前、兄はいつも「俺の殿堂入りは永久にないだろうな」と口にしていただけに私には感慨深いものがありました。同年夏、ヤフードームの表彰式では最大のライバルであった王さんからレリーフを授かりました。兄の心情は如何ばかりか、私は涙がこみ上げて仕方がありませんでした。最後に殿堂入りに選出していただいた委員会の皆様には深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。

野球殿堂博物館 トピックス（2014年11月～2015年１月編）

【11月13日】菊池 涼介選手、高橋 朋己投手来館！

2014 SUZUKI日米野球に出場した侍ジャパンの菊池 涼介選手（広島）と高橋 朋己投手（埼玉西武）が来館。プロ野球80周年記念「日米野球展 ベーブ・ルース来日から80年」を見学されました。

リリーフカーに乗って

【11月16日】ガスリー選手、赤星氏来館！

2014 SUZUKI日米野球に出場した大リーグ選抜のジェレミー・ガスリー選手（ロイヤルズ）と侍ジャパンアンバサダーの赤星 憲広氏が来館し、「日米野球展ベーブ・ルース来日から 80年」を見学されました。ガスリー選手からは、11月15日の日米野球第３戦で着用したロイヤルズの帽子をご寄贈いただき、現在大リーグコーナーで展示中です。

1934年日米野球で着用された全日本とアメリカ選抜チームのユニホームと一緒に

廣瀬館長へ帽子を寄贈するガスリー選手

【11月21日】鈴木 啓示氏（2002HOF）来館！

2002年野球殿堂入りの鈴木 啓示氏が来館されました。

【11月22日】ジャイアンツ新入団選手が来館！

読売ジャイアンツの新入団選手が来館されました。選手たちは、当館外にある戦没プロ野球人の名前が刻まれた「鎮魂の碑」や、企画展「日米野球展 ベーブ・ルース来日から80年」、プロ野球の歴史を紹介する展示や野球殿堂ホールなどを見学されました。

原 辰徳監督のルーキーイヤー（1981年）のユニホームを囲んで記念撮影

【11月25日】「NPB12球団ジュニアトーナメント ENEOS CUP 2014」の記者会見開催！

野球殿堂ホールにて「NPB 12 球団ジュニアトーナメント ENEOS CUP 2014」の記者会見が行われました。会見では、予選リーグの組み合わせ抽選会が行われたのち、各ジュニアチームの監督が大会への意気込みをコメントしました。

各ジュニアチームの監督による組み合わせ抽選

【11月26日】元女子プロ野球選手の髙坂 峰子氏来館！

元女子プロ野球選手の髙坂 峰子氏と現・日本女子プロ野球機構の岩崎恭子氏が来館されました。髙坂氏は、1950年に発足した女子プロ野球大阪ダイヤモンドなどで活躍しました。女子野球コーナーでは、髙坂氏が当時使用していたグラブとミットを展示中です。

女子野球コーナーで記念撮影　左から髙坂氏、岩崎氏

ユニホームを着てガッツポーズ

【12月３日】村田 真一氏、元木 大介氏来館！

巨人軍OBの村田 真一氏、元木 大介氏が来館されました。

左から村田氏、廣瀬館長、元木氏
野球殿堂ホールの「NPB 80周年ベストナイン」展示の前で

【12月５日】中村 稔氏、西本 聖氏来館！

巨人軍元投手の中村 稔氏、西本 聖氏が来館されました。

中村 稔氏

西本 聖氏

【12月18日】大谷 翔平選手（日本ハム）来館！

北海道日本ハムファイターズの大谷 翔平選手が来館されました。大谷選手は、企画展「日本野球ポスター展 2014」をご覧になり、「日本野球ポスター2014 総選挙」にも投票してくださいました。

大谷選手がモデルをつとめるファイターズのポスター「逆襲の開幕」の前で記念撮影

【１月２日】バッターボックス体験コーナー映像リニューアル 侍ジャパン６投手が登場！

１月２日より、イベントコーナーにある「バッターボックス体験」の映像をリニューアルしました。「2014 SUZUKI 日米野球」に出場した侍ジャパントップチームの松葉 貴大投手、則本 昂大投手、井納 翔一投手、藤浪 晋太郎投手、牧田 和久投手、岩田 稔投手が登場し、選手たちの迫力ある投球映像を体験することができます。

博物館からのお知らせ

▶販売中

● NPB統一球オーセンティックボール 2,600円（税込）

シリアルナンバー入り NPB承認シール付き ※2014年使用球

当博物館受付にて販売しております。

※郵送希望の方は、「公認球希望」と明記の上、代金（公認球代+梱包送料）を現金書留で当博物館までご送付下さい。

公 認 球：１個 2,600円

梱包送料：１個 250円　２～３個 400円　４個以上 送料無料

送 付 先：〒112-0004 東京都文京区後楽１－３－61
公益財団法人野球殿堂博物館 公認球係

●長嶋 茂雄氏・王 貞治氏　クオ・カード

価格 各1,000円
※額面500円

野球殿堂入りの長嶋 茂雄氏と王 貞治氏の「クオ・カード」です。

※なお、引続き日米野球のテレホンカードも販売しています。

価格 1,000円
※50度数

●編集後記　１月13日にプロ野球新人研修の一環で、新人選手の皆さんが、博物館を見学されました。今回は、その時のようすをご紹介しています。また今号は、１月23日に行われた野球殿堂入り記者発表の記事を掲載するため、発行が遅くなりました。

▶展示中！

上野 由岐子投手（ソフトボール日本代表）着用ユニホーム展示！

第17回アジア競技大会のソフトボール競技で、上野 由岐子投手が着用したユニホームを日本ソフトボール協会よりご寄贈いただきました。野球とソフトボールは、オリンピック競技復帰をめざし、「一つの競技」として協調・協力して復帰活動に取り組んでいることを示すため、ソフトボール女子日本代表のユニホームにも、野球日本代表「侍ジャパン」が使用している「JAPAN」ロゴおよび侍ジャパンダイヤモンドストライプが使用されるようになりました。ソフトボール女子日本代表は同大会で４連覇を達成しました。ユニホームは、日本代表コーナーで展示中です。

博物館のご案内

場　所	東京ドーム21ゲート右
開館時間	３月１日～９月30日 AM10時～PM６時 10月１日～２月末日 AM10時～PM５時 （入館は閉館の30分前まで）
入 館 料	大　人 600円（500円） 高・大学生 400円 小・中学生 200円（150円） 65 歳 以 上 400円 （　）は20名以上の団体
休 館 日	月曜日（祝日、プロ野球開催日、春・夏休み中の月曜日は開館） 年末年始（12月29日～１月１日）

《２月・３月・４月 の休館日》

２月　２日・９日・16日・23日
３月　２日・９日・16日・23日
４月　６日・13日・20日・27日

野球殿堂博物館 Newsletter 第24巻 第４号
2015年２月10日発行（年４回発行）
編集・発行　公益財団法人 野球殿堂博物館
（旧・財団法人 野球体育博物館）
〒112－0004　東京都文京区後楽１－３－61
Tel 03（3811）3600　Fax 03（3811）5369
http://www.baseball-museum.or.jp/

リレー随筆(58)

長いこと福岡に住み

競技者表彰委員会幹事　　中島　泉（スポーツニッポン新聞社）

長いこと福岡市に住み、野球の取材をしていると年々、あの西鉄ライオンズの存在感が薄れていくのがよく分かる。福岡ではソフトバンクホークスが最初のプロ球団だと思い込んでいる若い野球ファンも結構いるし「平和台で野球をやってた？マジっすか！」と驚かれたことも１度や２度ではない。

確かに古代の迎賓館である鴻臚（こうろ）館の遺跡が外野席の地下から発見され、その発掘調査などで今や更地になっている平和台球場跡からは、当時のスタンドの熱狂ぶりをうかがい知ることはできない。だが、かつてここを本拠に一時代を築いた伝説の野武士チームがあったのだ。1956年から３年連続して日本シリーズで巨人を倒し３連覇を果たした後、八百長にからむ「黒い霧事件」でチームは弱体化し、72年には３年連続最下位による観客減と球団経営悪化のためチームを身売り。太平洋クラブ、クラウンライターを経て78年に所沢移転で福岡を去った。球団譲渡からすでに43年、３連覇からは半世紀以上、57年が経った。

当然、若々しかった野武士たちも年を取った。黄金時代は「１番・センター高倉」で始まり、「９番・ピッチャー稲尾」で終わる不動のラインアップだったが、そのメンバーのうち大下 弘さん、関口 清治さん、河野 昭修さん、仰木 彬さん、和田 博実さん、そして稲尾 和久さんがすでに他界した。健在なのは80歳の高倉 照幸さん、79歳の豊田 泰光さん、81歳の中西 太さんだけ。豊田さんの「３人じゃもう野球はできんもんなあ」という嘆きは切実だ。

毎年暮れに福岡市で催す「西鉄ライオンズ OB会大忘年会」は昨年、８回目を迎えた。昨年８月に球団創設期の主力だった塚本 悦郎さん（享年90）が、同12月には久留米商 OB で明大出の外野手、荻 隆雄さん（享年79）がなくなり、またメンバーが減った。高齢のため東京在住の豊田さん、中西さんの大看板２人がこのところ顔を見せないため、OB は福岡を中心に九州在住者たち14人のみの参加だった。

OB以外には島原キャンプの宿舎だった旅館「国光屋」主人で元島原市長の鐘ヶ江 管一さん、稲尾さんの三女、長谷川 恭子さん、関口さんや河村 英文さんの夫人など遺族や関係者、ファンらが集まった。あいさつに立った高倉 OB会副会長は「OB は年々減る一方。寂しい限りだが、野球ファンのみなさんには西鉄ライオンズをいつまでも覚えておいてほしい」と切々と訴えた。

そんな状況の中で西鉄ライオンズ魂を次世代に手渡そうと高倉さんは福岡市の中学生硬式野球チーム「福岡南リトルシニア」を88年から監督として、その後は会長・総監督として26年にわたって指導してきた。その功績が認められ、昨年は福岡県スポーツ功労表彰と文部科学省の「生涯スポーツ功労者」表彰のダブル受賞を果たした。

また57年に西鉄入りし、中西さんの後継三塁手として活躍した城戸 則文さんは「今年で75歳になったが、高校を出てからずっと野球に携わってきて一度も離れていないのが自分の誇り」と胸を張った。63年巨人との日本シリーズで首位打者に輝いた西鉄後期の名プレーヤーはコーチやスカウトを経て92年から福岡市の社会人チーム、沖データコンピュータ教育学院の総合コーチを務めてきた。教え子からは11年ドラフト３位で巨人入りし、昨季は移籍先の広島でブレークした一岡 竜司投手が育つなど球界への恩返しを続ける。

球団がなくなったため OB会メンバーは減りこそすれ、増えることはない。だが、３連覇チームから三原 脩監督、大下さん、稲尾さん、中西さん、仰木さん、豊田さんと６人が野球殿堂入りし、Ｖ９巨人に匹敵する球界への貢献を果たした伝説の球団であればなおさら西鉄ライオンズの記憶と記録は風化させたくない。そんな思いを込めて若い世代に西鉄ライオンズの遺産を伝えようとする高倉さんや城戸さんたちの働きは貴重に思える。